

学 位 論 文 要 旨

研究題目

Complications and Predictive Factors for Air Leak > 10 Days with Neoadjuvant Chemotherapy Followed by Pleurectomy/Decortication for Malignant Pleural Mesothelioma

(悪性胸膜中皮腫に対する胸膜切除/肺剥皮術後の合併症および術後 10 日より長く持続するエアリークのリスク因子)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻

器官・代謝制御系

呼吸器外科学 (指導教授 長谷川誠紀)

氏 名 中村 晃史

目的：悪性胸膜中皮腫 (malignant pleural mesothelioma, 以下 MPM) に対する胸膜切除/肺剥皮術 (pleurectomy/decortication, 以下 P/D) 後の詳細な合併症の報告は少ない。本研究の目的は、MPM に対し術前化学療法 (neoadjuvant chemotherapy, 以下 NAC) 後に P/D を実施した症例の 1. 術後合併症の詳細 (grade 別) を検討すること、2. 難治性の術後エアリークの予測因子の評価をすることである。

方法：当院で 2012 年 9 月から 2020 年 5 月の間に MPM に対し NAC 後に P/D を実施した連続 163 例の患者データを後方視的に分析した。術後合併症の詳細については Clavien-Dindo 分類を用いて検討した。また、難治性の術後エアリークのリスクが高いグループを特定するために、術後 10 日より長く続くエアリークを AL10 として、その予測因子を単変量および多変量解析を使用して検討した。

結果：163 例の術後 30 日と 90 日の死亡率はそれぞれ 0.6% と 2.5% であった。Clavien-Dindo 分類において、84 例 (51.4%) が grade III 以上の術後合併症を認めた。術後エアリークの期間は中央値術後 7 日であった。AL10 は 53 例 (32.5%) で発生した。163 例中 58 人 (35.6%) は胸膜癒着術を受け、5 例 (3.1%) は術後エアリークを制御するために再手術を受けた。単変量解析では、Performance status (PS) ($p = 0.003$)、予後栄養指数 (prognostic nutritional index, PNI) ($p = 0.01$)、および術前胸水貯留 ($p = 0.04$) は、AL10 の有意なリスク因子であった。多変量解析では、PS (odds ratio; 4.0, 95%CI 1.3-12.7, $p = 0.02$) のみが、AL10 についてのリスク因子であった。

結論：NAC 後の P/D の術後死亡率は許容範囲内であった。約 3 例に 1 例が AL10 を認め、PS は AL10 に関連するリスク因子であった。